

---

# 理想の恋(涼希バージョン)

神童サーガ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

理想の恋（涼希バージョン）

### 【Nコード】

N4463F

### 【作者名】

神童サーガ

### 【あらすじ】

先に「理想の恋（沙莉バージョン）」を見ることをお勧めします。内容は、同じですが視点は涼希です。

俺の名前は、きむら じょうま木村涼希。

今年、中学二年生になった。

女の子と会話をしたことが無かった。

理由は、俺は運動も勉強もダメダメなんだ。

ほぼ、見た目で得してたけどドジな俺がモテるわけも無く……。

容姿は、茶色の髪と瞳。生まれつきなんだ。

身長は、158センチと低い。

恋なんてしたことが無かった。

みんな容姿ばかり見て、内面を知ると冷めた目で見える。

「なあ……涼希!!」

友人が話し掛けてきた。俺の唯一の友人な男。  
なに？と疲れた態度で話し返す。

「……オレのイトコの姉さんの友達が、お前に会いたいって」

随分遠い人からだ。どうせ、容姿ばかりなんだろうな。  
でも、なんでわざわざ友人を通したんだろ？

「頼む!!来てくれないと姉さんにボコられる」

別にボコられても、俺には関係無いけど、俺に会いたって気になる。

「いつ？」

「今度の休みだ!!」

楽しみにしてる自分がいた。

そして、約束の日になり友人のイトコの姉さんの家に着いた。

「良かった来てくれて・・・」

友人に連れられて着いた場所は、何も無い部屋。  
テーブルのみあってジュースなどが乗っかってた。

「君が木村くん？」

扉から現れたのは女の人だった。  
この人がイトコかな。

「あのね・・・私の友人なんだけど・・・名前は、木之本沙莉」

木之本きののもと 沙莉さり

けっこう可愛い名前なんだな。名前負けしなきゃ良いけど・・・  
って、俺なんで毒舌なんだ？

「沙莉はね・・・木村くんが好きみたいなの・・・初恋らしいの・・・  
だから、それを踏まえて話をしてほしいの」

友達想いだな・・・。普通だったら、迷惑になりそうだけど。それ  
ほど思ってるんだ。

「わ、分かりました」

とりあえずは、話をしてみないと分らないし・・・。  
俺・・・緊張してるの？

「あ、来たみたい」

イトコのお姉さんは外へ行ったみたいだ。

「けっこう可愛いんだぜ？木之本さんって」

なんで、そんな人が俺なんかを？

階段を上る音が聞こえてきた。

脈拍が早い。痛いし。

ドアノブを回すと同時に深呼吸をした。

「初めまして……この子が沙莉だよ」

この子が俺を……か。

可愛いと思った。クラスの女子よりも。

「あ……初めまして」

俺と同じく緊張してるのかな？声が枯れてるし……。ちょっと緊張が解けてきた。

「後は二人で良いよね？」

え・・・いきなり？  
友人達は、部屋を出てった。

「・・・」

うわ〜どうしよう！！女の子と話したことなんて無いし・・・。  
しかも、この人クールだ。

「えっと・・・オレの名前は、木村涼希です」

とりあえず挨拶しておかなきゃ。最低限のマナーだよな。

「えっと・・・座りませんか？」

・・・。  
なんで、こっち来ないんだろう？嫌いじゃないって言ってたけど・・・。  
テーブルを挟んで、俺の前に座った木之本さん。  
なんで、沈黙になるんだろう？無口だなあ、この人。

「・・・俺・・・14ですが・・・あの・・・木之本さんは？」

「あ、私は・・・17です・・・それに、沙莉で良いです」

そっか、年上か。やっぱり安定感があるよ。

「お、俺も・・・涼希で良いです・・・さ、沙莉さん」

な、名前呼ぶだけでドキドキするなんて・・・。  
いつもの俺じゃない。

「・・・えつと俺・・・あまり女の子と会話したこと無くて・・・  
その・・・何を言えば良いか・・・ツマンなくてごめんなさい」

7

いつも、つまらなそうにしてるし・・・友人達が。  
免疫無いし。両親以外で、異性と話したのって初めてかも・・・。

「・・・私こそごめん・・・何話せばいいか分らなくて」

はあ・・・良かった。飽きて無くて。

「モテるでしょ?」

「・・・いや、全然。俺・・・何やってもダメダメなんだ」

確かにモテるけど、みんな見た目だけだから、本当にモテてるんじゃない

沙莉さんは、ダメな俺をどう思ってたんだろう？

「クスツ……」

「な、なに!？」

「うふふ……ごめんね。意外だったから」

な、なんで笑うんだ!？恥かしいじゃんか!!  
でも、なんか心がおかしい。理由は分らないけど……。  
笑った顔が可愛いと思った。

「涼希クンさ……敬語止めない?」

「いや……でも先輩……」

「私も敬語止めるから」

敬語だったかな?気付かなかったけど……。  
でも、こうやって沙莉さんと話せるのは嬉しい。

「わ、分った・・・」

やっぱり抵抗あるな、年上だし・・・。

「涼希くんって好きな人っているの？」

聞かれた時、ドキッとした。

何でだろう？

俺の好きな人・・・か。

「・・・お、俺は・・・その・・・」

こつこつ話の免疫も無い俺は、赤くなるしか無かった。

「よく・・・分らないんだ。好きなのか・・・違うのか」

「同じクラスの女の子？」

違う・・・。クラスには好きな人なんていない。

俺は、首を横に振った。

「・・・俺の初恋なんだ・・・」

「お姉さんに相談しなさい！！何でも答えるよ」

「これが、好きなんだろうな。一目ボレか・・・。  
相談って・・・。そうだ！！」

「沙莉さんの理想の告白って・・・なに？」

「え・・・？私！？・・・え〜っと・・・直球に・・・好き  
って・・・」

「沙莉さんは、直球が良いんだ・・・。  
俺が言っても気付いてくれるかな？」

「・・・好き・・・どう？」

「ど、ど、どって・・・」

「あれ？手応え無いなあ。失敗だったかな？」

「・・・だから惚れる？」

今度こそ気付いてよ？

告白だから、しっかりしなきゃ・・・。

「ほ、惚れるよ・・・涼希くんみたいなカッコいい子に言われたら・・・その好きな子もさ・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・だよね」

どこまで鈍感なんだろう？俺のこと好きなんだよね。ちよっとイライラしてきた。

「頑張つてね。私、応援するから」

「・・・なんで？」

なんで好きなのに応援するの？おかしいよ。  
俺に対しての想いって、そんなものだったの？

「沙莉さんって、今まで恋愛したこと無いよな？」

初恋って言ってたから分らないんだ。  
俺の想い返してよ。

「なんで……分った」

「……気付いてよ。俺ちゃんと告白したのに」

なんかムカつくけど、もう言う。言わないつもりだったのにな。

「勘違い……しても良い？告白だって」

「さっきからしてる」

でも、鈍感な沙莉さんを好きになったのは俺なんだよな。

積極的じゃない沙莉さんなら、絶対に自分から告白なんて言わないだろうね。

それでも、俺自身も変わった。たった数時間だけ話してるだけなのに。

でも、意地でも好きって、その口から言わせる。

このままじゃ、俺の負けだし。

(後書き)

なんか、思ったたよりも涼希の性格の変化が激しかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4463f/>

---

理想の恋(涼希バージョン)

2010年10月28日03時01分発行